

平成 28 年 4 月 20 日

# 南の風 181

南部ミニバスケットボール連盟  
会 長 藤原 敬一

「プレイヤーズファースト」のまとめです。

オーストリアの心理学者、アルフレッド・アドラーは、子どもを育てる時に親や指導者が、注意しなければいけないことの一番に「子どもの勇気をくじいてはいけない」ことを挙げています。また、子どもの努力が報われなくても親が絶望してはいけないし、子どもが消極的だからと言って失敗を予想してはいけないと言っています。さらに、才能がある子どもと才能がない子どもがいるという迷信を信じてはいけないし、心理学は子どもたちに勇気と自信を与えるために使うべきものであるとも言っています。

「褒めて伸ばす」ということが言われます。怒ったり、体罰を与えたりすることが逆効果であることはいまや常識として捉えられています。しかし「褒める」ことも一歩間違えると危険だということになるようです。児童心理学では「褒め方」について注意書きを添えています。

例えばバスケットボールで、「すごいね、よくシュート決めたね。」「頑張ってディフェンスしたね。」など褒めるという行為は大体の場合ポジティブな気持ちにさせます。しかし、子どもが「褒められるために」行動するようになると、悪影響になり得るということです。心理学では「褒める」という行為が上下関係を前提にしていると考えからです。上から目線で褒めたとしても子どもはいつか「お母さんバスケットボール知らないくせに」「お父さんだってできないくせに」と、上から評価されることを嫌うようになります。

さて、ではどんな声掛けが適切なのでしょう？

心理学では、褒めるのではなく「勇気づける」ことを推奨しているようです。対等な立場に立って、サポートすることを奨めているようです。「頑張ったね」「えらかったね」というより「ありがとう」「助かった」という言葉の方が、子どもの心を動かすとされています。

私見です。自分の実践を書きます。私はよく選手を叱ります。あとで「言わなければよかったな」と反省することもたくさんあります。ただ私が選手と向き合う時に大切にしていることは、「チャレンジしなさい」ということです。「ミスは構わない、練習したことに挑戦しなさい」と言います。うまくいかないとは仕方ないことです。「やってみよう」と追い込みます。そして、私が大事にしていることは、選手にチームにいることの「存在感」を確認させることです。「君のあのディフェンスが効いた」「君のパスが勝利につながったんだ」「君のシュートでチームが活気づいた」「シュートは入らなかったけど、味方にリバウンドに行くチャンスを与えてくれた」と言う具合に、なるべく具体的に「存在感を自分で確認させる」ようにしています。また、ゲームが終了した時に、「あの声だしがよかった」「水分補給の手助けが上手にできた」と言う具合に、ゲームに出なかった選手にも、「自分もチームに貢献できたな」と「存在感」を確認させるようにしています。存在感や所属感の確認が、次への活力に繋がると思うからです。

プレイヤーズファーストについて連載してきました。私自身、この連載を書きながら指導の至らなさを感じています。選手の指導は本当に難しいものです。「最近なんだかうまくいかないなあ」と感じた時は、プレイヤーズファーストの精神に立ち返るようにしています。